

СОЗВЕЗДИЕ КОЗЛОТУРА

Ф. ИСКАНДЕР



牛山羊の星座

СОЗВЕДИЕ КОЗМОТУРА

イスカンデール



群像社

現代ロシア文学 6
牛山羊の星座

一九八五年四月十五日 初版発行 ©

定価 一八〇〇円

著者 イスカンデル

訳者 浦 雅春

発行者 浅川彰三

発行所 株式会社 群像社

〒102 東京都千代田区平河町一―四―十二

振替 東京四―九五九四三

電話(〇三)二六四―〇三〇一(代)

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

訳者略歴

浦 雅春

1948年大阪生まれ。

1971年神戸市立外国語大学ロシア学科卒業。

1983年早稲田大学大学院文学研究科露文専攻博士課程修了。

訳書：エドワード・ブローン著『メイエルホリドの全体像』（晶文社，1982年）

ISBN 4-905821-16-9

△作品集▽

牛^う山^し羊^{やぎ}の星座

イスカンドール 著

浦 雅春・訳

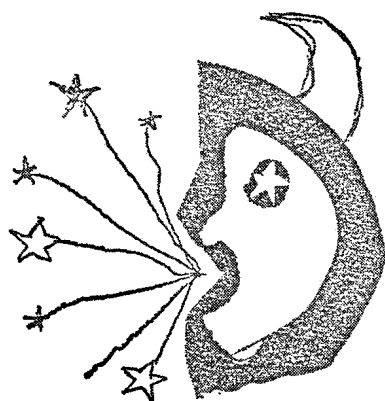
装帧·山本美智代

目

次

295	265	241	217	203	191	167	5
解説 訳者	手紙	ぼくの伯父さんは恐ろしく四角四面の男だが…	ヘラクレス十三番目の功業	禁断の木の实	雄鶏	ぼくの出発	牛山羊の星座
	293						
301				216		189	166
			239				
		264					

牛^う山^し羊^やの^ぎ星座



ある日突然、ぼくは勤めてまだ一年と経っていない中央ロシアの青少年新聞をお払い箱になった。その新聞社に入ったのは、大学卒業後の就職斡旋によるものだった。

どういふ悪魔の差し金か、その編集長が詩を書いていたのである。詩を書くだけならまだしも、彼は土地のお偉方への気兼ねからそれをペンネームで発表していた。もっとも、後日わかったことだが、ペンネームは何の役にも立っていなかった。ここのお偉方たちはこの男が詩を書いていることはとうにご承知で、まあそれくらいの趣味は青少年新聞の編集長なら致し方あるまいと見ていたのだった。

お偉方はご承知かもしれないが、ぼくは知らなかった。それでぼくは初めての編集会議で、うちの新聞に載った一篇の詩を貶しはじめたのである。貶しはしたが、嘲笑する気は毛頭なかった。モスクワ仕込みの厭味の一つや二つはあったかもしれない。しかしそれは都会の大学出たての若僧のやることだ、大目にみてくれたってよさそうなものだろう。

発言の途中で同僚たちの妙な顔付きに気付かぬでもなかったが、大して気にもとめなかった。正直いって、みんなぼくのさわやかな弁舌にすっかり感心しているのだとばかり思っていた。

それにしても忌々しいのはあの詩だ。あれさえなければぼくもこんな目に遭わずにすんだのだった。農村のコムソモール員が書いたことになっているその詩には、手作業に比べ芋掘り機械がどんなにすぐれているか、その長所が綿々と書き連ねてあったのである。

根が単純で、文学的にもナイーブなぼくは、これはてっきり世の新聞社に送られてくる通り一辺の詩のたぐいにすぎぬと決めてかかった。それでも、頭ごなしに作者を愚弄するのも気がひけるので、村のコムソモール員にしては誤字も脱字もなく立派なものですよ、と言いつ添えた。

この一件以来もう二度と編集長の詩にいちやもんをつけたことはなかったが、相手はそうは思わず、陰でこそこそ難癖をつけているのだらうと思ひ込んでいたらしい。

早い話が、新聞社には詩人は一人でじゅうぶんだと編集長は正当な判断を下したのである。それがどんな詩人か、編集長には迷いはなかった。その点ぼくにも異論はない。

春に人員整理のキャンペーンが始まり、ぼくがそのとばっちりをうけたのである。春はたしかに人員整理の季節だが、好きな女の子と別れるにはふさわしくない。

そのころぼくはある娘にぞっこん参っていた。彼女は昼間軍の事務所で会計係をし、夜は夜学に通っていた。勤めと学校の合い間をやり繰りしてデートに当てるのだが、生憎と相手はぼく一人じゃなかった。彼女はデートという花をふり撒いていた。

当時の彼女は胸に大きな花束をかかえ、無雑作に相手かまわず花をふり撒いているみたいだった。そんな花を一本でも貰った男は、これで彼女は自分のものだとしてんでに早合点した。そのため、しょっちゅう行き違いが絶えなかった。

いつだったか、ぼくたちは公園で落ちあい、大きな古い菩提樹の植わった並木道をしばらく散歩した。とてもすばらしい宵だった——遠くで音楽が聞こえ、足許でかさこそと落葉が音を立て、夕

闇のなかで彼女の顔がぼうつと浮かんでいた。

並木のかげから街灯に照らされた、少し開けた場所にでたところで、ぼくは若い連中がたむろしているのに気付いた。一番人相の悪い、なかの一人が仲間から離れ、つかつかとこちらに向かってきた。ああいう顔は苦手だ、来るならほかのやつにしてもらいたいと思ったが、生憎とやってきたのはその男だった。

ぼくらのところまで来ると、男はいきなり彼女を張りどばした。ぼくが飛びかかり、二人でとくみ合いになった。ところがそうするうちに仲間の連中がやってきて、なにもかも台なしにしてしまった。ぼくはきれいにのされた。現代ではロマンチックな決闘なんて成り立たぬらしい。

多少のズレはあったのだろうが、彼女はほぼ同じ時間にそいつともデートの約束をしていたのである。

「かまわないけど、場所ぐらゐ変えりゃいいじゃないか」彼女の神経がぼくにはわからなかった。「それもそうね」と、笑いながら彼女はやさしくぼくのジャケットを払ってくれた。「おかげであたしもこのさまだわ」

彼女を見て、ぼくはうら悲しくなった——彼女には何だって似合うんだ。頬をぶたれて彼女の顔は一段ときれいだった。

最近彼女はあつ少佐から追いまわされていた。ぼくらからみればいい年をした小父さんだった。よくその男のことを彼女は笑いながら話題にするのだが、ぼくは気が気じゃなかった。女の子ときたら自分にお熱の男をさんざん茶化しておきながら、相手の押しが強いと、それだけで結婚しかねないのである。だって一緒にいるだけで楽しいんだもの、というわけだ。ぼくの睨んだところ、少佐の押しは相当のものだった。

それやこれやでぼくにしてみれば仕事に身が入るわけもなく、編集長の密かな策略に格好の口実を与えることになった。

狙いがぼくだということをごまかすために、編集長はぼくと一緒に編集部の清掃婦を誂にした。首を切るなら編集部付きの二人の運転手だったのである。ひと月前から燃料節約のキャンペーンが始まってガソリンの配給がストップしていたため、二人はまったくにもすることがなかったのである。その弛みよるときたら、髭は伸ばし放題、明けても暮れても外套もとらず、編集部の長椅子に腰をすえて将棋を指すというありさまで、顔はといえば、二日酔いが抜けず荒さみきつていた。

おかげでわれわれは車をとばせば一日で済む取材に何日もかけた。まだ出張経費の節減キャンペーンが実施されていなかったのである。

それはともかく、人員整理が断行されて、ぼくは故郷に帰ることになった。新聞社は気前よく金の清算をつけた。給料のほかに、得体のしれぬ退職金、それに最近の記事の稿料までくれた。こと金銭面に関してはまだ学生気分の抜けていなかったぼくは、これで二か月は遊んで暮せると思った。

ぼくはお別れに彼女を夜学まで送った。

「必ずお手紙ちょうだいね」そういうと、最後のどこやかな微笑みを投げかけて、彼女は雄々しく夜学の暗い戸口に消えていった。

これほどの愛ならば時の流れにも別離にも左右されるものか、とは思ってみるのだが、それでも彼女の男らしいともいえる態度にはいささかがっかりさせられた。ぼくはそんな微笑みなんかではなく、それとわかる未練の情を示してもらいたかった。

その夕方、公園のベンチでぼくは自分の来しかた行く末を考えた。ベンチは夜露にぬれていた。公園はすでに花が綻んでいるにもかかわらず、木々はまだ葉をつけず、寒々としていた。いきなり拡声器からソルヴェイグの歌が流れてきた。それを聞いていると知らず知らずのうちにぼくは、自分を欺いてソルヴェイグの心根を彼女にだぶらせていた。

そうだ、こんなにも美しい曲が創られる世の中は、どんなに悪がはびころうと、幸福であるべきだ、いや幸福になるにちがいない——とそんなことを考えた。

青臭いといわれるかもしれないが、ぼくも世界の改造に参加するんだ。もう大人になってもいい頃だ、大人の問題をちゃんと扱う新聞社に入ろう、と思った。

鹹になったから言うわけではないが、もう、うちの新聞社の優等生的なことば使いや、あの威勢のいい痴呆的な明るさにはほとほと厭気がさしていた。

思想など薬にしたくもなく、あるのは奇想ばかり、若々しさではなく馬鹿ばかしさ、陽気さではなく暢気さ、深刻さではなく深刻づらには、ほんとうんざりだった。

人間万事塞翁が馬、よし、ぼくも立派に新聞記者になってみせるぞ、そうすればあの娘もぼくを理解し見直してくれるというものさ。

いったい何を理解してくれるのか、それを言われると自分でもよくわからないが、見直してくれることだけは確かなように思えた。

夜、友人たちがモスクワに向かう汽車までぼくを見送ってくれた。励ましの言葉に感激してぼくは一路モスクワをめざした。そこから南に下り、幸多い南国の故郷に帰ろうという算段だ。

途中立ち寄ったモスクワで、ぼくは詩を一篇活字にすることができた。なかなか幸先のいいすべりだしかった。まだモスクワで活字になったことのない編集長にこれでひと泡ふかせてやったので

ある。そればかりか、この詩はぼくより一足先に故郷に帰り、ぼくが就職したいと思っていた地元の新聞「赤い亜熱帯」で名刺がわりを務めた。

「読ませてもらったよ」と、社の廊下でぼくを見つけるなり、編集長のアフタンジール・アフタンジロヴィチが声をかけてきた。「ものは相談だが、故郷に帰ってくる気はないかね？」

相手はぼくが休暇で戻ってきたと思っっているらしい。

「はい、実はそのつもりなんです」それから二人で話を煮詰めた。古手の編集部員が退職したら、ぼくを採ってくれることに決まった。

それからひと月ばかりは海辺をぶらぶら散策して時間を潰した。人気がない海岸を歩きながら、愁いに沈みがちな思いをなんとか詩の形に押し込めようとしていた。彼女に出した二通の手紙には返事がなかった。自尊心の手前それ以上こちからは便りを出さなかった。いや、そう言えば、もう一通かつての同僚に便りを送った。そのなかでぼくは自分がちゃんとした大人の新聞社に採用されたことに触れ、気がむいたらいつでもその社に手紙をくれ給えと書いた。それに、機会があったら人にもぼくの近況を伝えてくれても構わないよとも付け加えた。そして最後に、くれぐれも皆みなさまによりしくと手紙を結んだ。手紙はなかなか落着きがあり、寛大な調子がよく出ていたと思う。

強烈な海の匂いと、今を盛りと咲きほこる藤の花の柔らかな女性的な香りをはらんだ故郷の空気がぼくを落着かせた。潮風に溶けこんだヨードがからだばかりか心の傷手をも癒してくれたのかもしれない。明けても暮れても一日中ぼくは誰もいない砂浜にごろりと横になり、からだを焼いた。たまに土地の女たらしどもが数人たむろしてそばを通りすぎていった。彼らは一戦を目前に控えた司令官が地勢を下検分するように、わがもの顔に海岸を睥睨した。

辞めるはずの男がようやく退職に同意した。このころ、年金受給年齢に達したならばすみやかに退職すべしというちょっとしたキャンペーンがあったのである。当人はまだ矍鑠かくしやくとしていたが、否応なく首をたてに振らされたわけだ。盛大な送別会を催してもらったうえに、男はゴムボートまで贈呈された。当人は釣具のスピニングが欲しそうな素振りをみせていたが、それに耳を貸す者は誰もいなかった。それでなくても地区委員会の金庫はからっぽだった。後日男は、自分は無理に辞めさせられただとか、約束のスピニングも貰えなかったと愚痴をこぼして回ったが、スピニングを約束した者など誰もいなかった。約束したのはゴムボートであって、その約束はきちんと果たされたのである。ほんとスピニングの話なんか全然なかった。

こんなことをくどくど書くのは、ぼくは地元社員として、かつまたこの土地に住宅を持っている者として正式に採用されたのに、ある意味では彼を追いついて職を奪った形になってしまったからだ。

この新聞社の社員とは知らぬ仲でもなかった。学生時分から夏休みには自分の書いたものを送って、何度か自分を売込んだことがあった。売込みには成功しなかったが、その社員についてはある程度知識をえた。

少なくとも言えることは、編集長のアフタンジール・アフタンジロウィチは詩を書いたこともなければ、どだい詩を書くような玉ではないということだ。それどころか、ぼくの記憶する限り、彼は在職中ただの一度も文章を書いたことなどなかった。

彼は生まれついて敏腕をもってなる指導者だった。ぼくの郷里の多くの人間がそうであるように、彼もまた生来の宴会の才に恵まれていた。上背のある体、もじゃもじゃ頭、立派な男っぷり——それらは彼を宴会の席にも大きな会議の議長団にもふさわしい、いや、それどころかこうした

席に欠かせぬ人物に仕立てていた。彼はコーカサスのあらゆる民族の言葉を自由に操り、彼がとる乾杯の音頭には通訳が要らなかった。

新聞社の編集長に就任する前、彼は地元産業の牽引者であった。もちろん、ちっぽけな愛らしいアブハジア自治共和国のことだから、産業といってもその規模は高が知れている。恐らく彼はその重責をじゅうぶんに全うしたのだろう、いや十二分にこなしたにちがいない、彼をさらに責任ある地位に就けなければならなくなった。それでポストがあくと彼はたちまち新聞社の編集長に引き上げられたのである。

敏腕の指導者として生まれついた彼は、たちどころに新しい仕事をものにした。実際その辣腕ぶりはめざましかった。農工業の重要問題を扱う論説記事が中央紙と同時に、それどころか一日早くこの新聞に載ることもまれではなかった。

ぼくは希望がかなって農業部に採用された。当時は農業部門で画期的な改革が次々と生まれていた。こうした問題を詳さに検討し、その動向を見極め、行くゆくはその専門家になりたいというのがぼくの夢だった。

農業部のキャップはプラトン・サムソーノヴィチであった。彼の名前はべつに驚くにあたらない。ここではそういう名前が掃いてすてるほど多いのである。その昔、黒海沿岸がギリシャやローマの植民地だった名残りだろう。

プラトン・サムソーノヴィチとは以前から知り合いだった。物静かな温厚な人物で、ぼくたちはよく釣りに出かけた。彼はこの近辺では一番の年季の入った釣りの名人だった。

ところが、ぼくが新聞社に入ってみると、彼はすっかり別人になっていた。釣りのことなど眼中になく、ボートも売払っていた。妙に目をギラつかせ、いわくありげに口を真一文字に結び、熱に